

## 28 . タマラオの物語 (ミンダナオ)

昔々、たいそう前のこと、高く霧の深いキダパワンの山々の中に、貧しい農夫と彼の妻がいました。この正直で働き者の夫婦には、タマオという若くハンサムな息子がいました。彼は、毎日彼らの農場の畑で両親を助けていました。彼は土地を掘り、野菜を植え、それに水をやり、またその野菜を収穫していました。

タマオは、たいへん強く、勇気がありました。他の農夫たちは、彼に「タマラオ」というニックネームをつけました。それは、「勇敢なタマオ」という意味です。勇敢なタマオは、常にどこへ行くにも、彼の弓と矢を持って行きました。彼はまた、鋭い手斧を持っていました。特に農場の畑で働いている時です。なぜなら、キダパワンの丘には、野蛮な盗賊がたくさんいて、しばしば、貧しく無力な農民を、警告なしに襲い、彼らの子どもをさらうからです。これらの血に飢えた盗賊は、山の離れたところにある町で、奴隷として、誘拐した子どもたちを売ります。

ある日、タマオは、年取った父と畑で熱心に働いていましたが、野蛮な盗賊が急に霧の中から現れ、彼らを襲いました。野性的に叫び、鋭い槍と斧を空中で振り回しました。タマオは勇敢な戦いをしましたが、盗賊と鋭い武器の数で、完全に負けていました。タマオは盗賊にさらわれ、丘の暗い森深く連れ去られて、盗賊たちは、引き上げました。年取った農夫と彼の困惑した妻は、彼らの勇敢な息子タマオに二度と会えないかと思うと、たいへん悲しくなりました。

日暮れまでに、野蛮な盗賊たちは、暗い森の反対側までたどり着きました。たいへん激しい雨が降ってきたので、盗賊たちは、川を渡って、丘の遠い町まで行くことはできません。彼らは大きな川のそばにある、暗い森のはずれで、夜を過ごさなければなりません。彼らはタマオをしっかりと木に結びつけ、そして、夜、休むためにそこに腰掛けました。

タマオは眠れませんでした。彼は木から自由に

なるために、もがきました。しかし、盗賊はロープでしっかりと結んでいたため、タマオは息をしたり、動いたりしにくかったのです。彼が、ただひとつ考えていたことは、逃げて、農場の母と父のところへ帰ることでした。首の周りにタマオは特別なお守りを着けていました。その幸福の首飾りは、彼が幼い時、霧の丘のまじない師か祈祷師に与えられるものでした。タマオは、まじない師が彼に言ったことを思い出しました。そのお守りは、彼が危険になった時、彼を助けることができる、ということでした。その場合、タマオがしなければならぬことは、お守りを手の中に握って、しっかりと目を閉じて、神に助けを祈ることでした。

しかし、タマオの手は、しっかりと縛られていて、彼は動かすこともできず、言うまでもなく、手にお守りを持つこともできませんでした。ですから、タマオは目を閉じて、彼を助けるように、暗い森の女神に祈るだけでした。しかし、突然、タマオを木にしっかりと縛っていたロープが、魔法にかかったようにほどけて、地面に落ちました。タマオは、彼に不思議な感覚が来るのを感じました。そして、驚くようなことが起こりました。タマオは四足になって、彼の腕と足は毛に覆われ、ヒヅメがついた動物の足にかわりました。そして、ふたつの大きな曲がった角が、タマオの頭から生えました。そして、タマオの体のお尻から、尻尾が生えました。タマオが話そうとすると、ただブウブウという声が彼の口から出ました。

すると、森の美しい女神が、びっくりしているタマオの前に現われ、彼女の手には、魔法の枝を持っていました。彼女はタマオに微笑んで言いました。「タマオ、さあ、私はあなたをすごい力とすばらしい勇気を持った真のタマラオにします。今日から、あなたは野蛮な盗賊から農民を守るようになります。そして、彼らはもう二度と罪のない子どもたちが、誘拐されて、奴隷として売られることはありません。」彼女が現れたのと同様、不思議に、森の美しい女神は、夜の暗闇に消えて行きました。

森の美しい女神の声に目覚めて、野蛮な盗賊はゆっくり起き上がりました。奇妙な、激しいタマラオを見て、彼らは恐れしました。なぜなら、彼らはそれまで、そのような大きく強い動物を見たことがなかったのです。野蛮な盗賊は、走ろうとしました。しかし、タマラオは彼らを捕らえ、彼のすごい力とすばらしい勇気で、彼らを殺したのです。

勝利を得たタマラオは、彼の農場に帰り、母と父を安心させました。そして、確かに、その日からは、タマラオは、農民の畑が、野蛮な盗賊に悩まされることが二度となく、盗賊から守られていることを不思議に思いました。霧の丘の人々は、彼らの守護者として、強く勇気のあるタマラオがいることで、たいへん幸福でした。